

まちづくり ひろしま

被爆100年(西暦2045年)の姿をめざして

第62号 (令和4年11月15日)

読者数: 673名(募集中)

メール: hirosima.idea.c@chugokuc.co.jp

HP: <https://machizukurihiroshima.web.fc2.com/index.htm>

〒733-0002 広島市西区楠木町1-9-7

発行人: 前岡智之、編集人: 瀧口信二

配信元: 広島アイデアコンペ実行委員会

ご提案・ご意見等は、こちらまで

ウクライナに平和を！平和を我らに！



○谷本清平和賞に選定
ANTの渡部朋子さん



○どうする『わたしたちの』図書館
勝手に検討フェス: 対談トーク



○今年の8・15のつどいは
8月14日に
講師 永田浩三氏



○時代を語り建築を語る会
ガリーナ・シェフツォバ教授

目次

- 巻頭言: 研究者と研究資金と研究内容と—この日本の救いがたい状況
……………広島諸事・地域再生研究所主宰 石丸紀興
- 特別寄稿: 広島中央公園の建ぺい率問題を問う……………編集委員 瀧口信二
- ひろしまのまちづくりの動き
 - ・こども図書館は残す、市長が方針を撤回
 - ・旧軍関連施設も埋蔵文化財に
- トピックス: 祝 ANTの渡部朋子さん谷本清平和賞に選定
- 「どうする『わたしたちの』図書館、勝手に検討フェスティバル」報告
- 「旧陸軍被服支廠の活用策を探る広島県の動き」その4……………コメント 松原 綾
- 「今年の8・15のつどいは8月14日に」報告
- 「時代を語り建築を語る会」の報告: 語り人 ガリーナ・シェフツォバ教授
- 編集後記: メールマガジンの役割……………編集委員 前岡智之

□ 巻頭言

研究者と研究資金と研究内容と—この日本の救いがたい状況

広島諸事・地域再生研究所主宰 石丸紀興

恐らくどなたも我がことのように深刻に考えてもらえないと思うが、これはこの10年で進行し、時代を貫く構造的な問題となったことを訴えたい。それは、もはや簡単に変更・改革できることではなく、まさに日本における現実であり、そして最近、私が予想していた通りのことが遂に起きてしまったという実態である。

それは、いくつかの報道機関が報じたところでもあるが（2022年8月9日付朝日新聞デジタル版他）、日本の学術研究論文数が遂に韓国に追い越されたということである。かつてはアメリカに追随していたが、その後中国に抜かれ、今や韓国、スペインにも抜かれて12位という状況になったのである。人口を勘案すればその差は歴然としてくる。「なんだそんなことか」と反論されるかもしれないが、実態はいよいよ深刻なのである。ある分野での引用される論文数も2000年代での世界順位4位という順位も、今や12位とはるかに下落してしまっている。

数年前からの日本人でノーベル賞受賞者が決まったとき、コメントで必ずといってよいほど言及されていたのが、「現在の日本における研究費の著しく少なく、救いがたい実態」であり、「自分たちの頃は比較的自由に研究できていたのに今や全く失われたという研究環境」のことであった。多くは人ごとのように受けとめたであろうが、それがまさに日本の将来を暗示していると気付かなければならない。

以前私が広島大学に在籍していたころ、中国からの留学生が研究室で学位を取得し、ある私学に助教授として勤務していたが、懸命に研究しても上の教授が評価してくれないというので、ついに中国に帰国して教授になった。そのことは別として、問題は中国で日本にいた頃と研究費が3倍になったというのである。その実態は確かめていないが、少なくとも中国では飛躍的に研究費と研究環境を向上させていることは確かで、科学技術関連の統計に如実に表れている。

この間、日本でやってきたことといえば、研究費の重点配分と称して評価される研究に厚く、評価できないとされる研究にはいよいよ薄く、人件費の削減と合わせて現状維持さえできない実態となっている。科学技術立国などというスローガンはとくに誰も信じられないほどのレベルになっているといえる（ここでは掲載しないが、科学技術予算や論文部数の国際比較をインターネットで検索していただきたい。日本の惨状、最近の傾向が明らかである）。

そして「研究費でボールペンが買えない」というある大学講師のツイッターから始まったとされる大学ファンド制度が船出しようとしているが、そもそも運用益で研究インフラを支援するというその発想は小手先の効率主義、短期的視点そのもので全く未来が見えない。

韓国についてそんなに意識する必要はないとする意見もあろうが、多くの局面で韓国に追い越されつつあり、研究論文数はその一端である。旧統一教会問題は、日本から巨額に集金されて韓国の幹部によって勝手に流用されていたことも、韓国人から同情されるのではなく、日本の保守派といわれる政治家達が、かくも簡単に集票システム提供によって骨抜きにされていたことが、嘲笑の対象となっている。

8年8カ月という長期政権を評価する声もあるが、この間一貫して科学技術関連予算、文教予算を軽視しただけでなく、管理政策の強化を推進してきた。この政権幹部が権力の私物化していたことを多くの国民は知っているし、長期政権をそのまま引き継いだ菅政権が、日本学術会議会員の再任拒否問題を起こしたことは記憶に新しい。これらのことは日本における科学技術政策を象徴していて、今や大学等の研究費をとことんケチり、管理・運営を強化しているのである。

大学がいかに多忙を極めているかご存じだろうか。外部資金の導入といって研究費を獲得するためにも申請用紙作成に何日もかかり、研究代表者は研究の現場から遠ざかり、次第に大きな組織を動かしての研究が幅をきかせてくる。研究会一つの日程もなかなか決まらず、研究以外の学内の管理運営関係の業務も増える一方である。日本の研究者総数と研究開発費は高い水準を維持していると言われるが、その実態はどうか。今や研究時間の減少や実質的な研究スタッフの弱体化など研究力の低下は目を覆うほどである。

現在あらゆるところで進行している短期的効率主義や成果主義、外から強制されている場合も

含めて、学術問題は検討すべきことがあまりに多い。

研究論文さえ多くなれば良いとか、研究費が増額されればよいとかいうものではなく、研究内容こそが問題であるが、そのことを問う仕組みさえ無力である。問題の根源は何か、現下の学術政策の根本的見直しを含めて、日本が今後どのような道を進もうとしているのか、そのことを踏まえた学術問題のはずである。

現実はいかに無造作に扱われ、いや軽視さえされてきたかという学術問題を、今こそ政権と国民に問い直すべきことを迫りたい。それは学術に携わる主体に自らの再点検、再検討を迫っていくことも必須なのである。

□ 特別寄稿

広島中央公園の建ぺい率問題を問う

編集委員 瀧口信二

(削除)

ひろしまのまちづくりの動き

① こども図書館は残す、市長が方針を撤回！

広島市長は9月市議会で、こども図書館は中央図書館等のエールエールA館への移転と切り離し、現在地に残すと答弁。中央図書館等の再整備方針（素案）に対する市民からの意見や要望に応えたという。

それを受けて市民団体からは、今のこども図書館は手狭で老朽化しているので建て替え、併せて中央図書館、映像文化ライブラリーの現地建て替えを要望。

さらに青少年センターもこども図書館移転後のスペースに移す市の案に対して反対の声が上がっている。若者の文化活動の拠点として現有面積の4分の1に縮小されることに対する不満である。移転する場合は規模と機能を維持し、エールエールA館への移転を希望しているようだが、現在の劇場型ホールの機能を確保することは難しい。

中央公園に位置する中央図書館、こども図書館、映像文化ライブラリー、青少年センターは、それぞれの機能を整理し総合的に考えていかなければいけない。

市の小出しの対応では混乱を招くのみである。中央公園には建ぺい率の上限があるので、

既存の施設やこれから整備する予定の施設を含めた全体のマスタープランを早急に練り直す必要がある。十分に時間をかけて検討し、未来に禍根を残さないようにして欲しい。

② 旧軍関連施設も埋蔵文化財に！

広島市は旧日本軍の第五師団司令部など（中区）、旧陸軍の被服支廠（南区）、糧秣支廠（同）、兵器補給廠（同）、似島の馬匹検疫所などの遺跡が地中から見つかった場合、埋蔵文化財として扱うことを決めた。

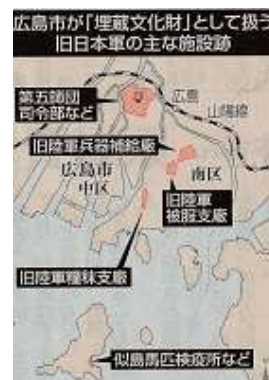
2021年にサッカー場建設地から旧陸軍輸送部隊「中国管区輜重兵補充隊（輜重隊）」の被爆遺構が出てきたが、市は十分な検討をすることもなく、一部切り取り保存で決着させ、工事を優先させた。

2020年秋に発掘調査工事に取り掛かる前から輜重隊の遺構が出ることは分かっていたながら、半年以上も伏せていた市の責任は重い。

市民は中国新聞 2021年6月の「ヒロシマの空白・被爆76年・証を残す 輜重隊遺構」のシリーズ報道で初めて知ることになる。

市民団体、被爆者団体、考古学の専門家等から批判の声が上がったが、市は取り合わなかった。8月には日本近代史における戦争遺跡を研究・保存する団体などでつくる戦争遺跡保存全国ネットワークなどが主催する「戦争遺跡の保存について考える全国シンポジウム」が広島で開催され、軍都としての広島の遺跡の保存運動と課題等について議論した。

今回、日本考古学協会などからの要望を受ける形で、市埋蔵文化財取扱基準を変更。「明治期以降の主要な軍関係の機関・施設跡」が追加され、重要な史跡として保存される。



中国新聞 2022. 9. 7

ロトピックス

祝 ANT の渡部朋子さん谷本清平和賞に選定



このメルマガにも何度か登場された NGO 法人 ANT-Hiroshima 理事長の渡部朋子さんが第 34 回谷本清平和賞に選ばれた。

この賞は、公益財団法人ヒロシマ・ピース・センターの設立に尽力し、原爆の惨状と平和の尊さを米国で訴えた故谷本清牧師の遺志を継承するために 1987 年に創設された。

ヒロシマ・ピース・センターが世界平和の実現に向けて活動する個人や団体に授与するもので、贈呈式は 11 月 13 日に開かれる。過去の実賞者には、吉永小百合氏、平岡敬氏、坪井直氏、サーロー節子氏などがいる。

受賞理由は、平和都市・広島を拠点として長年にわたって核なき世界を目指し、「ヒロシマを受けつぐ」教育プロジェクト、平和教育活動、被爆者の体験記録など、ANT-Hiroshima の活動が評価されたものであろう。

ANT には「アリ」と「Asian Network of Trust」（アジアの信頼のネットワーク）という 2 つの意味が込められている。一人一人の力は小さくとも、信頼のきずなをベースに、国内外の人々・NGO などと協働することで大きな平和を実現できると信じて、様々な事業を展開している NGO である。

ANT-Hiroshima の主な事業の 1 つに「Sadako の絵本プロジェクト」がある。原爆による白血病のため 12 歳で亡くなった広島の少女、佐々木禎子さんの生涯と、彼女の同級生たちが行った「原爆の子の像」の建立運動について描かれた絵本「おりづるの旅」を、ダリ語・英語・ネパール語・タガログ語など多数の言語に翻訳し、平和への祈りを込めて、紛争地を中心とした世界各地に届けている。

渡部さんにはこのメルマガでも、第 21 号の「[人物登場](#)」、第 43 号の[メルマガ7周年記念シンポジウム](#)のパネリストとして、また第 29 号と第 53 号の「[巻頭言](#)」に登場してもらった。特に第 53 号の[巻頭言](#)（*リンク参照）は魂がこもったものであり、是非ご一読願いたい。（渡部さんのコメント NHK NEWS WEB より）

この広島の地で私を育ててくださった多くの被爆者の皆様や被爆者に寄り添ってこられた方々に心から御礼申し上げたい。国内外の多くの仲間たちとともに誰もとり残さない、核のない平和な世界を目指してこれからも歩み続けます。

○ 「どうする『わたしたちの』図書館、勝手に検討フェスティバル (*リンク参照)」 **報告**

広島市の図書館移転問題に端を発し、広島のみならず何を何とかしたいと憂う若い人たちが「ひろしまのシビックプライド（市民力）を考える会」を結成し、10時間にも及ぶ長時間のトークイベントを実施。主要なポイントを紹介する。

日時：2022年8月21日（日）10:00～20:00

会場：port.cloud（広島商工会議所9F）/オンライン配信

主催：ひろしまのシビックプライド（市民力）を考える会

後援：広島市/広島市教育委員会



「ひろしまのシビックプライドを考える会」は、『自分たちがほしいまちの未来は自分たちでつくる』をモットーに、シティビジョン（行政・開発会社主導）とシビックプライド（当事者意識に基づく自負心）の官民共同作業を掲げ、メンバーはカフェ店主や会社代表、NPO 法人代表理事、作家、記者など現在 10 名。

トークイベントの内容は以下の通り。

あこがれの図書館の事例紹介

- ・フィンランドのヘルシンキ中央図書館 Oodi：市川文子（リ・パブリック）による解説。2018年に開館し、世界最高の図書館に選定。ありとあらゆる文化活動を内包する図書館を目指す。サードプレイスとして多種多様な人が参加できる場所がよい。
- ・ぎふメディアコスモス：主催者メンバー清水浩司（ライター）による視察体験談。伊藤豊雄の設計。市立中央図書館・市民活動交流センター、多文化交流プラザなど「知」と「絆」と「文化」の複合拠点。図書館は本と人とまちをつなぐ屋根が付いた公園。
- ・群馬「太田市美術館・図書館」：設計者平田晃久の設計プロセスの話。設計上の重要な決定をワークショップと呼ばれる市民や行政との共同セッションで行う。設計の各段階で設計者がたたき台を提示し、みんなで議論して決定し、次に進む。
同上：主催者メンバー今田順（ブックキュレーター）による視察体験談。見た目がカッコよく、本の貸し借りだけではなく居心地の良さがあり、みんなで作る図書館を実感。館の中で一番長く過ごす司書たちが誇りを持って従事している。

ゲストトーク

- ・逆井健（元福岡県荊田町立図書館館長）・・・日頃、図書館に関わりを持たない人を惹きつけるためのイベントを実施し、図書館の存在感を高めた。図書館の真の役割は本の貸出しではなく、情報のやり取りを促進する場であり、もっと利用者の声を聞くべき。
- ・平尾順平（ひろしまジン大学代表理事）・・・広島市の社会教育委員会のメンバーとして委員会での審議内容を紹介。今回、整備方針（素案）を議論したが、機能の羅列で優先順位もなく、意見を出しにくい。このテーマの審議会を作って十分な議論をすべき。
- ・岡本真（アカデミック・リソース・ガイド）・・・神奈川県立図書館の廃止の危機を乗り越えた図書館アドバイザーからの忠告。「県立図書館を考える会」の基本ビジョンは、
1. 勝者・敗者を作らない 2. 反対ではなく提言する 3. 図書館運動にしない
- ・長谷富美（広島市中央図書館長）・・・図書館は知の拠点と言われるが、「知と行動」及び「知と協働」の拠点を目指す。司書の資質向上を図り、市民の知る・学ぶを支援する場だけでなく、ビジネス等の人やまちの課題解決を支援していく場とする。

対談トーク

ゲスト：平岡敬元広島市長

主催者：谷口千春（ミナガルテン代表）

宮崎園子（フリーランス記者）

宮崎：1991年から2期8年広島市長を務められた平岡さんを迎え、市長時代の経験談を交えて、これからの広島のみならずまちづくりや図書館の在り方について語っていただく。

平岡：広島は国際平和文化都市を標榜しているが、人類最初の被爆都市としては国際・平和・文化のうち平和が一番重みがあり、1949年に制定された広島平和記念都市建設法を起点としている。



市長に選ばれた動機は、1994年のアジア大会を成功させることであり、アジアとの融和を図るため就任最初の平和宣言でアジアの人々に対して侵略した過去への謝罪をした。

谷口：今の広島市は楯岡都市構想に取り組んでいるが、市長時代はどうだったか。

平岡：当時は都市基盤はほぼ整いつつあったので、市民の生活を豊かにするためのソフト面にシフト。市民参加を図るための人材づくりに力点を置き、広島市民大学を創設。

被爆50周年記念事業として「ひろしま2045：ピース&クリエイト」をスタートさせ、建築のデザインから個性ある都市景観を形成し、平和と創造のまちにしようとした。

「基町高等学校」「矢野南小学校」「西消防署」「中清掃工場」等、話題になる建築を多く残し、被爆100年の2045年まで続けられれば、世界に誇れる街にすることができたであろう。

谷口：世界から見たときの広島には負うべき責任があると同時にポジティブな権利もある。世界から選ばれ続けるような魅力的なまちにするための構想を練っていききたい。

市民が誇れる街にするためには、行政や開発会社側が頑張るだけでなく、プライドを持った多くの市民が参画して一緒に取り組むべきである。

平岡：広島市の都市像を示す基本計画があるが、一つ心残りは比治山の活用だ。放影研が山から下りた後には博物館構想があり、比治山全体を芸術博物館ゾーンと位置付けている。

少子高齢化社会になり、利便性の良いコンパクトシティが謳われ、市街地に高層マンションが林立している。便利かもしれないが、大地との触れ合いは捨てがたくアナログ人間の自分としては入居したいとは思わない。

デジタルが幅を利かせて手軽に情報が手に入るが、身につくかどうか。子供は本を読むことにより、思考力を鍛え、情操を豊かにして成長できる。未来を託す子供たちを育む図書館は自然に囲まれた環境が望ましい。

谷口：デジタルとアナログにはそれぞれ長所・短所があり、お互いの良さを生かす方策を新しい図書館には取り込めたい。図書館のアーカイブ機能は堅牢な構造が必要だが、それ以外はフレキシブルな空間で、居心地の良さが望まれる。

これからは競争ではなく、共創の時代。圧倒的なリーダーではなく、各分野の先見の明のある人たちの知恵を集め、うまく統合していく編集力のあるリーダーが求められている。そういう人材を育てるのが市政の役割ではないか。

平岡：今は賑わいづくりに力を入れているが、金もうけの発想。これからは市民の幸せを第一に考えたまちづくりが求められる。「自然と共生」の思想を根底にして、教育と医療に重点を置くべき。平和教育も原爆ドームと原爆資料館に閉じ込めるのではなく、過去の歴史と六つの川・海・山に囲まれた広島の特性を生かして、平和を実感できる環境を作ることだ。市民がいろんなアイデアを出し合って、議論して決めていけばよいのではないか。

谷口：人類初の被爆地において広島市民が一番幸せに生きているまちを実現できれば、世界に向けて素晴らしいメッセージとなる。目先のことでなく、その先の未来に何を残していくのが幸せかを考えていきたい。

平岡：今一番心配しているのは、日本全体が右傾化し、平和や戦争反対を唱えることが憚られる社会が来るのではないかと、ということ。戦時中の風潮を知る者としては警戒している。その時、世界平和を訴えている広島が断固とした姿勢を示すことができるか否か。

美しいまちをつくる前に問われるのが、広島の平和を尊ぶアイデンティティである。

谷口：声を上げづらいムードにおいて、上げ続けられる人材をどう育てていくか、図書館の位置づけが問われている。読書により子供たちのリテラシー（識字能力）を高め、実行力のある人材を育成するだけでなく、司書の働きによりビジネスや社会問題の解決に導けるような企業家精神を育む場でもあってほしい。

宮崎：広島は悲しい過去とこれからの未来に向き合いやすい土地柄であり、子供たちと高齢者の間に立つ私たち世代がしっかり議論してこれからの道を切り開いていかなければいけない。今回の図書館移転問題はその良き先例となるように闊達な議論をしていきたい。

（会場より）

馬庭恭子市議会議員：エールエール館への移転については、市の第三セクター・広島駅南口開発（株）の経営を救済するという市民には見えづらい裏の話があった。

*会場参加者を含めて多彩な人が登場し、画期的なトークセッションとなった。ひろしまの市民力が高まり、着実に前進することを希う。 （編集委員 瀧口信二）

○ 「旧陸軍被服支廠の活用策を探る広島県の動き」 報告その4

広島県は有識者による安全対策・価値調査等検討会議を開き、被服支廠の耐震化の実施設計や国の重要文化財指定に向けた歴史的価値の調査の検討を行っている。それと並行して被服支廠の活用策を考える有識者懇談会を開き、来年3月末までに活用策の方向性をまとめる。

安全対策・価値調査等検討会議は10月に第2回目が開かれ、耐震工事の工法案を了承。また、旧広島陸軍被服支廠の設計者が国重要文化財の旧近衛師団司令部庁舎を手掛けた陸軍技師と判明したことを報告。県は重要文化財指定に向けた貴重な材料と判断。

有識者懇談会の方は7月に第4回目が開かれ、分野別委員から資金調達の問題と知名度を高める必要性の指摘があり、旧陸軍被服支廠に変わる親しみやすい愛称をつけるべきではないかという提案があった。

その傘下にあるワークショップは、時・人・場所をつなぎ「みんなで守り・育て続ける」被服支廠を基本的な考え方としてすでに4回開催され、11月の最終回で取りまとめの予定。

ワークショップメンバー：松原 綾さんのコメント

被服支廠という建物。それ自体は昔から日常の風景として目の端に入っていたので、存在を知ってはいたが、深く考えたことがありませんでした。ただ、それが壊されるという話が出た時に、そんなに拙速に結論をだしてよいのだろうか？ と強く疑問に思いました。

当たり前ですが、建物は壊したら元に戻らないからです。「被爆建物なのになぜそんなことを言うのだろうか、行く末が気になる」と思い、こちらのワークショップに参加することにしました。

ワークショップ参加前のアンケートで、自分自身が考えている活用法を聞かれました。建築にたずさわる身として、建築に特化した展示場所として活用できるとよいなと思い提案したが、ワークショップに参加して、すぐに浅はかすぎる考えだと気付きました。

ここは被爆建物。ここで亡くなった方たちもたくさんいらっしゃる。誰一人幸せを感じる事のない戦争の苦しみと犠牲者への鎮魂の意を忘れてはならない。

そして、広島は軍都として発展し、被服支廠は元々軍服を作る場所だったという歴史的事実も知ってほしい。ただ、そういう事実はとても大事な前提ではあるけれど、そこだけにこだわると、現代において活用を考えるにあたり、重苦しいものになってしまいます。

そういうことも含め、ワークショップで参加者の色々な想いを聞いた上で浮かんできた私の活用のテーマは「皆に愛される、日常の平和を感じることができる場所」となりました。

それには地元の方々、近隣の学校の方々の関りが鍵になるのではないかと考えています。地元からじわじわと外に広がっていくというイメージです。特に学生の方々が、日常的に利用することで平和的活用ができるのではないかと考えています。

たとえ、その時に建物の意義を理解できなかったとしても、歴史的被爆建物の中で授業を受けたり行事を行ったりしたことが10年20年後に実は貴重な体験だったということに気付く、その価値を発信してくれるのではないかと思います。

具体的活用方法はまだまだこれからですが、このワークショップが県の「はい、一般市民の話の聞きまいた。おしまい」とならず、今後も継続して県民、国民を巻き込んで平和的活用を継続して考えていくことが大事だと思います。

○ 「今年の8・15のつどいは8月14日に」 報告

～反戦・原爆詩を朗読する市民のつどい～

メインゲスト：永田浩三氏（武蔵野大学社会学部教授）

2002年から「8・15のつどい」を企画し、8月15日の意味を問い直してきた。昨年は「暁の宇品」の著者・堀川恵子さんをメインゲストに迎え、改めて軍都広島について考えた。

今回は広島とゆかりの深い永田浩三氏に詩画人・四國五郎の業績をたどりながら、現在の日本社会が抱えている問題点等を考える場とした。

主催：広島文学資料保存の会・広島花幻忌の会・四國五郎
追悼の会

日時：2022年8月14日（日）14:00～16:30

場所：合人社ウエンディひと・まちプラザ



☆ 1部：朗読劇『神部ハナという女の一生』（作・小山祐士）

筋書きは、したたかであわいらしく、墮胎罪を犯し、戦争とヒロシマの過酷な歴史を背負うもぐりの助産婦を通して、庶民の光と影を描く。

今回は半分に圧縮した上演だったが、本番は10月2日福山、11月27日（日）広島で公演。

☆ 2部：講演「いま改めて四國五郎を想う～ウクライナ・核・表現の不自由」

講師・永田浩三氏（武蔵大学社会学部教授）



自己紹介

1954年大阪生まれ。東北大学を卒業後、NHKに入社。主にドキュメンタリーのディレクター、教養・情報番組を制作。2009年から武蔵大学社会学部メディア社会学科の教授として、学生たちにドキュメンタリーの歴史や制作を教える。

話の概要

安倍元首相銃殺事件や国葬問題、旧統一教会問題、ロシアのウクライナ軍事侵攻などのトピックスから、メインの四國五郎たちの戦後の活躍、更には身内の話や自分の取り組みなど幅広いテーマについて、約1時間半にわたりドキュメンタリータッチで事実を整然と語る。紙面の都合上、ここではメインのところを抜粋して紹介したい。

検閲に抗った表現者たち

20世紀最大のスクープと呼ばれる世界に初めて原爆被害を伝えた豪州記者の記事に恐れをなし、米国は直ちにプレスコードを敷く。メディア等に沈黙を強いた中で、抗ったのが広島の作家たち。大田洋子は小説「屍の町」を1945年11月に発表。原民喜は小説「夏の花」（最初のタイトル「原子爆弾」）や原爆を読んだ俳句を残す。歌人の正田篠枝も原爆を短歌に読む。

峠三吉と四國五郎 二人三脚の奮闘と別れ

四國五郎は3年間のシベリア抑留の後、広島に戻り、弟の原爆死を知る。弟の無念を晴らすことが人生の大きな宿題となり、「弟への鎮魂歌」、「五郎よ」ほか多数の詩と絵画を残す。

峠三吉は四國との共同作業で1949年に詩の月刊誌「われらの詩（うた）」を発行。さらに1950年の朝鮮戦争直前には、峠が詩を書き、四國が絵を描いたポスター「辻詩」を命がけで辻々に貼っていく。朝鮮戦争で核兵器使用の恐れがあり、市民に戦争反対を強く訴える。

1950年8月6日の広島の平和式典は前日に中止命令。その日、福屋百貨店屋上からピラをまき、短時間の反戦集会を開く。また丸木夫妻の「原爆の図」を見て、「原爆詩集」の編さんに着手。峠1953年没後、平和公園内に設置された「にんげんをかえせ」の詩碑は四國が設計。

市民が描いた原爆の絵

被爆30年の1975年頃になると原爆の風化が叫ばれ、NHK広島放送局が「市民が描いた原爆の絵」を募集するキャンペーンを実施。四國五郎も知恵袋となってスタジオから積極的に参加を呼びかけ、4000枚を超える絵が集まる。世界でも稀有な原爆の記録は今も分析が続く。

被爆体験を引き継ぐ

早晚地球上から被爆体験者がいなくなる前に、基町高校の生徒たちは被爆者から聞き取り、被爆の惨状を絵にしている。

2017年に批准された核兵器禁止条約の成立運動の立役者サーロー節子さんの心の支えは詩人栗原貞子で、特に日本軍の加害性を自覚することを訴えた詩「ヒロシマという時」である。

多くの子供は漫画「はだしのゲン」と四國の絵本「おこり地蔵」で原爆を知ったという。

結び

今のロシアのウクライナ軍事侵攻は広島の初期被爆者による反核運動時のリアリティが蘇り、今一度被爆者たちの運動に光を当てる視点を大事にしたい。

芸術や文学や学問からの発信は決して多数派ではないが、メディアは表現者たちを支えていかなければならない。それが豊かな言論空間につながり、最終的には平和につながる。

（文責：編集委員 瀧口信二）

○「時代を語り建築を語る会（第34回）」の報告

語り人：ガリーナ・シェフツォバ先生（キエウ国立建築建設大学教授）

テーマ：ロシア軍侵攻によるウクライナ都市・建築の
破壊・被害と今後の課題

～現地国立大学教授からの報告と討論～

ガリーナ先生の広島訪問のタイミングをとらえ、急きょ「語る会」が開催され、ロシア軍侵攻によるウクライナの実状等について聞く。

主催：時代を語り建築を語る会実行委員会（代表：石丸紀興）

日時：2022年8月24日（水）18:00～20:00

場所：合人社ウエンディひと・まちプラザ

☆ 今回来日の目的

ウクライナ・キエウ国立建築建設大学教授で、ウクライナの木造建築や建築の歴史を専門に研究。以前も阪大、京大他で歴史あるまちの再開発等の調査をした経験あり。今回、ウクライナの研究者を受け入れる東京大学のプログラムで6月に来日し、来年3月まで滞在。ロシアの軍事侵攻により街が破壊されたのを受け、日本における戦災復興の過程と現在の状況を調査し、特に広島・長崎の経験を学びたいと思う。

☆ ウクライナの被害の状況

2月24日に軍事侵攻が始まったが、その理由が今でもわからない。ロシアが侵攻準備をしているというニュースはあったが、冗談だと思い信じられなかった。

住んでいる首都キーウにも戦車が迫ってきたが、戦況についてはよくわからない。職場の近くにミサイルが着弾した。恐怖のため1週間後にはポーランドに近い町に住む友人宅に身を寄せたが、そこでもミサイルが飛んできた。1か月半後ロシア軍が撤退してからキーウに戻る。

現在、キーウは電気・ガス・水道等のトラブルはなく、平常に近い生活をしている。日本に来てからも毎日家族とインターネットで連絡を取り合っている。

☆ 広島と姉妹都市を組んだらよいと思う都市は？

ウクライナ南部のドネツィク州にあるマリウポリがいいのでは。アゾフ海に面した美しい港湾都市で、工業が盛んな人口40万人位の裕福なまち。今回のロシア侵攻の激戦地で今はロシアが占領している。

☆ 原爆資料館を見た印象

歴史的な事柄等の展示より焼け焦げた衣服や弁当箱など犠牲者の身近な遺品展示を見て、母国の惨状と思いが重なり共感した。

展示内容に問題はないが、個人的にはもう少し地図や図表などの科学的な情報があった方が分かりやすいと思う。

☆ 今後の展望は

ウクライナの方から折れることはない。領土を回復するまで戦わなければ、将来の子どもたちに禍根を残す。当面、NATOに入って、集団的安全保障を得ることが先決。

終戦が来れば、戦災復興に当たらなければならないが、まだその時期ではない。今は海外からの援助を要望。

☆ 質疑応答

・広島の復興過程が参考になったか？→広島の被爆後の状況とウクライナの現状とはパターンが全く違うので、同一には考えられない。ただ、原爆ドームを保存して被爆の記憶を残し、平和のシンボルにしたような手法は参考になる。

・ロシアに対する感情は？→ロシアはキエフから始まり、ウクライナとロシアは兄弟国と思っていた。今回の侵攻でロシアを憎んでいるが、個人的なロシアの友人とは仲良くしている。

ウクライナ緊急募金のお願い

日本ユニセフ協会が「ウクライナ緊急募金」を始めています。インターネットで「ウクライナ緊急募金」で検索すれば、クレジットカードその他での方法が可能です。

郵便局からは次の口座に募金ができます。

振替口座：00190-5-31000 口座名義：公益財団法人 日本ユニセフ協会
通信欄に「ウクライナ」と明記すれば「ウクライナ緊急募金」への寄付となります。



略歴：ウクライナ国立美術・建築大学卒、大学院修了。2022年3月まで東京大学小淵祐介研究室所属。ウクライナの木造教会等文化財保存修復研究

□ 編集後記

メールマガジンの役割

10年連続して発行されてきたこのメールマガジンの創刊号では、こう書かれている。

「あの被爆の焼土から、先輩方の汗と涙により築き上げられた現在のひろしまに、私達は、暮しています。都市の環境がめまぐるしく変化する中、広島に生まれ、育ち、活動する私達は、ここまでのまちづくりを学習し、再確認しながら「めざした平和記念都市ひろしま」を実現し続けることに積極的に参加したいと考えました。そして、今、動いているひろしまの内容をより多くの市民に知っていただき、考える場を提供し、実感をもってまちづくりに参加する一助となれば幸いです。」と

その間に絶えず課題としてきたのは、「めざしたひろしまの理念や姿はどのようなものか、まちづくりの計画性、連続性、実現性などがはっきりしているか」ということ、一方で「市民がこうしたまちづくりの基本方針の出所進退に実感を持っているか」であった。

知らないところで方針が決定され、いつの間にか実行される。それが将来に向けて妥当なのかどうか、広く意見を集約した結果なのか—パブリックコメントや諮問委員会そして議会での検討がなされたのか—、市民に知らされているのかなどを追い続けてきた。

一度しかない時代、一度しかない日々、ここでしかない我が街で、結果影響を受けるのは多くの無言の市民である。メールマガジンは、これらを明確にしていくことが役割であると強く感じている。

このままで良いのならいいが、良くないのであれば、これらを正し、改善する動きを始めるべきだし、関心を持って反応されなければならない。被曝100年の平和広島を目指して……
(編集委員 前岡智之)

***メルマガを読まれての感想や質問及びひろしまのまちづくりについて
皆さんの自由な提案・意見をお聞かせください!**

(投稿は500字程度でお願いします)

編集委員

石丸紀興	広島諸事・地域再生研究所主宰
高東博視	響け！平和の鐘実行委員会代表
瀧口信二	広島アイデアコンペ実行委員会事務局
通谷 章	ガリバープロダクツ代表
前岡智之	中国セントラルコンサルタント代表